

最近7ヶ年間の音声観察にあらわれた変声期

愛知学芸大学附属名古屋中学校 藪田 恵 一 郎

1) 音声観察と音声分類

生徒の歌唱時にあらわれる音声そのものを、次の基準にしたがって分類する。

a. 変声後の声 (+)

1. 巾のある低音域の声
2. 音程に安定性がある、1.の条件を満足させるもの
3. 自然に楽に発声できて、1.の条件を満足させるもの

b. 変声中の声 (±)

1. 声域の狭小であるもの
2. 音程が不確実であるもの
3. 呼気が苦しく発声困難なもの
4. 小字音域の高音域と、一点小字音域の低音域に声域がまたがっているもの

c. 変声前の声 (-)

1. 美しい頭声発声で歌えるもの
2. 一点小字音域の音が全部容易にできるもの
3. 高音域(二点小字音)の音程が安定しているもの

2) 被観察集団

A	集 団	(昭28入学)	124名
B	集 団	(㊦29㊦)	57名
C	集 団	(㊦30㊦)	60名
D	集 団	(㊦31㊦)	113名

E	集 団	(㊦32㊦)	85名
F	集 団	(㊦33㊦)	60名
G	集 団	(㊦34㊦)	60名

3) 観 察 期 間

昭和28年5月より昭和35年11月までの約7年6ヶ月間

4) 観 察 結 果

a. 中央値の変化

100人中50人のものが変声を完了すると思われる時期を、変声の中央値と呼び、これを集団ごとに比較すると、その時期が、つぎの表のように徐々に変化しつつあることが判明した。すなわち、変声の中央

集団名	A	B	C	D	E	F	G
中央値	中学2年生 7月	2年生 8月	2年生 5月	2年生 6月	2年生 5月	1年生 3月	1年生 2月

値は約7年間に約5ヶ月早期にあらわれるようになり、従来中学2年生が変声現象の最もはげしい時期とされていたものが、中学1年生の方が、よりこの現象が著しくあらわれるようである。

b. 集団別、観察月別の変声完了率の比較

各集団の示す変声完了率を、その一定の観察月ごとにあつめ比較すれば、各集団の変声完了率が年をおいて、どのように変化してきているかがうかがえる。試みに、5月と11月における各集団ごとの完了率と、A集団を基準にした完了率の増加分を()内に示せばつぎのようになる。

学年 観察月 集団名	中 学 1 年		中 学 2 年		中 学 3 年	
	5 月	11 月	5 月	11 月	5 月	11 月
A	0	8.5	38.4	67.2	92.3	98.0
B	1.8 (1.8)	9.0 (0.5)	32.4 (-6.0)	61.2 (-6.0)	97.2 (4.9)	100 (2.0)
C	5.1 (5.1)	28.9 (20.4)	49.3 (10.9)	74.8 (7.6)	95.2 (2.9)	100 (2.0)
D	1.8 (1.8)	19.8 (11.3)	40.5 (2.1)	72.0 (4.8)	99.1 (6.8)	100 (2.0)
E	6.8 (6.8)	25.5 (17.0)	45.6 (7.2)	81.6 (14.4)	100 (7.7)	100 (2.0)
F	9.9 (9.9)	29.7 (21.2)	59.6 (21.0)	79.2 (12.0)	100 (7.7)	100 (2.0)
G	8.5 (8.5)	34.0 (25.5)	64.6 (26.2)	88.4 (21.2)		

最近7ヶ年間の音声観察にあらわれた変声期

これによれば、

- ① 中学1年の5月においては、年平均1.6%
- ② 中学1年の11月においては、年平均2.7%
- ③ 中学2年の5月においては、年平均1.7%
- ④ 中学2年の11月においては、年平均1.5%

- ⑤ 中学3年の5月においては、年平均2.6%の割合で増加している
観察結果を総合的にみて、変声現象が、年々少しずつ早期にあらわれるようになったことを物語っている
-